

ピカイチ先生の  
生活経営セミナー

物理で考える資産運用  
(⑤ 精度と確度)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038  
福島県南相馬市原町区日の出町167-3  
info@next-life-consult.com



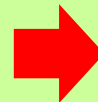
ピカイチ先生

ピカイチ先生

検索

# 「精度」と「確度」

[精度] : 不確定さ (誤差・バラツキ)



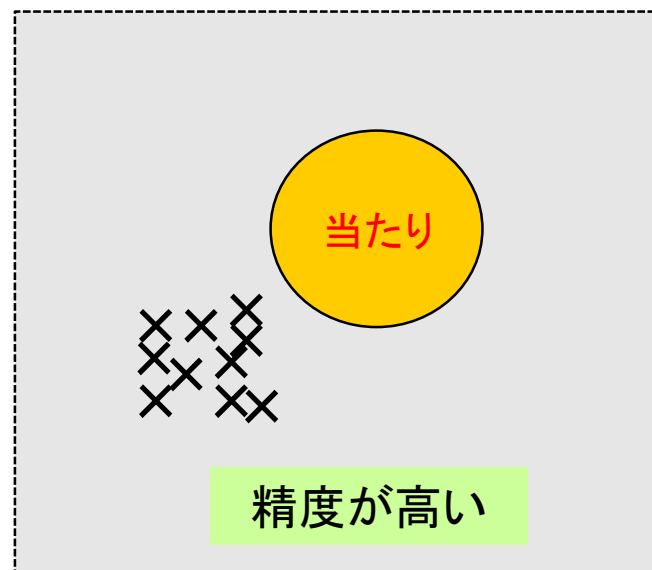
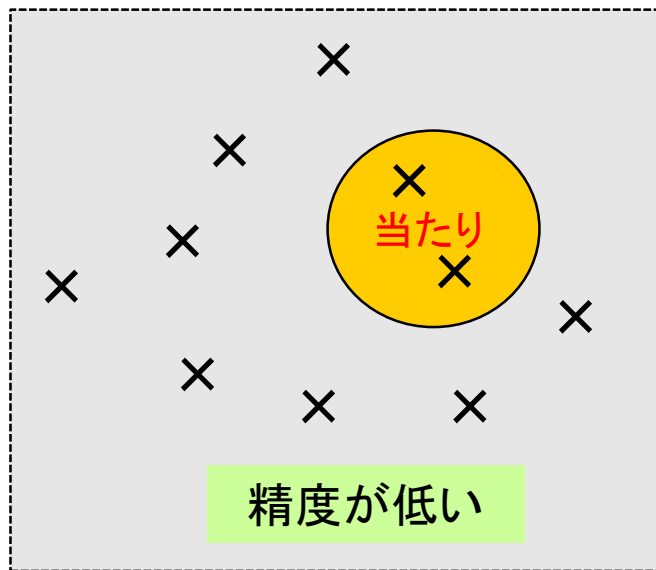
ムラ

[確度] : 不確実さ



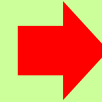
ムダ

弓道選手  
どちらが、上手？



# 投資の理論：『リスク＝不確定さ』

[精度]：不確定さ（誤差・バラツキ）



ムラ

[確度]：不確実さ



ムダ

リスク

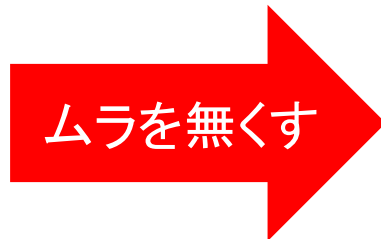
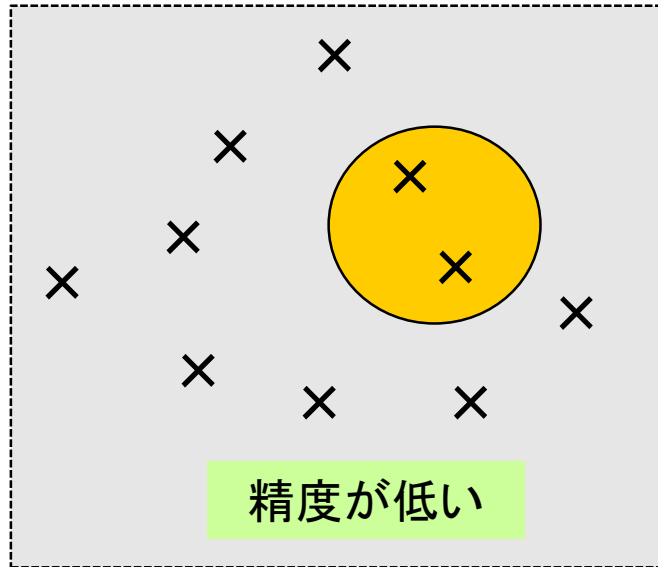
どちらが、リスクが大きい？

- ① 高さ1mの台から転落
- ② ビルの10階から転落

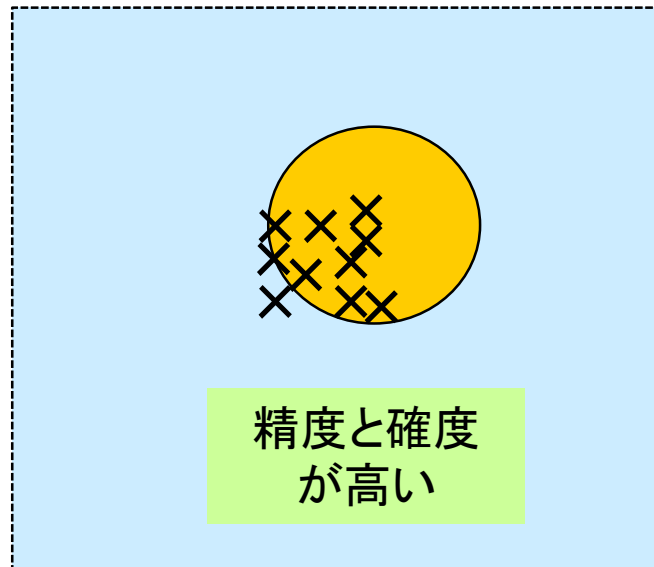
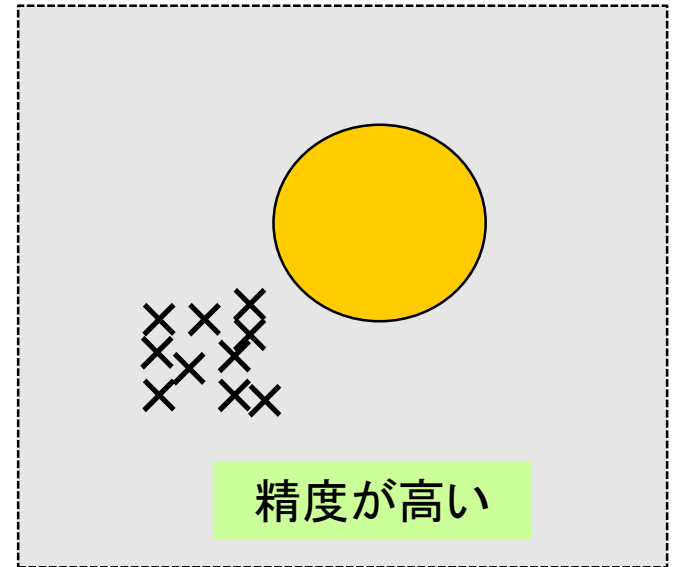
【不確定さ】

① > ②

# 現場の実践：『ムリ・ムラ・ムダを無くす』

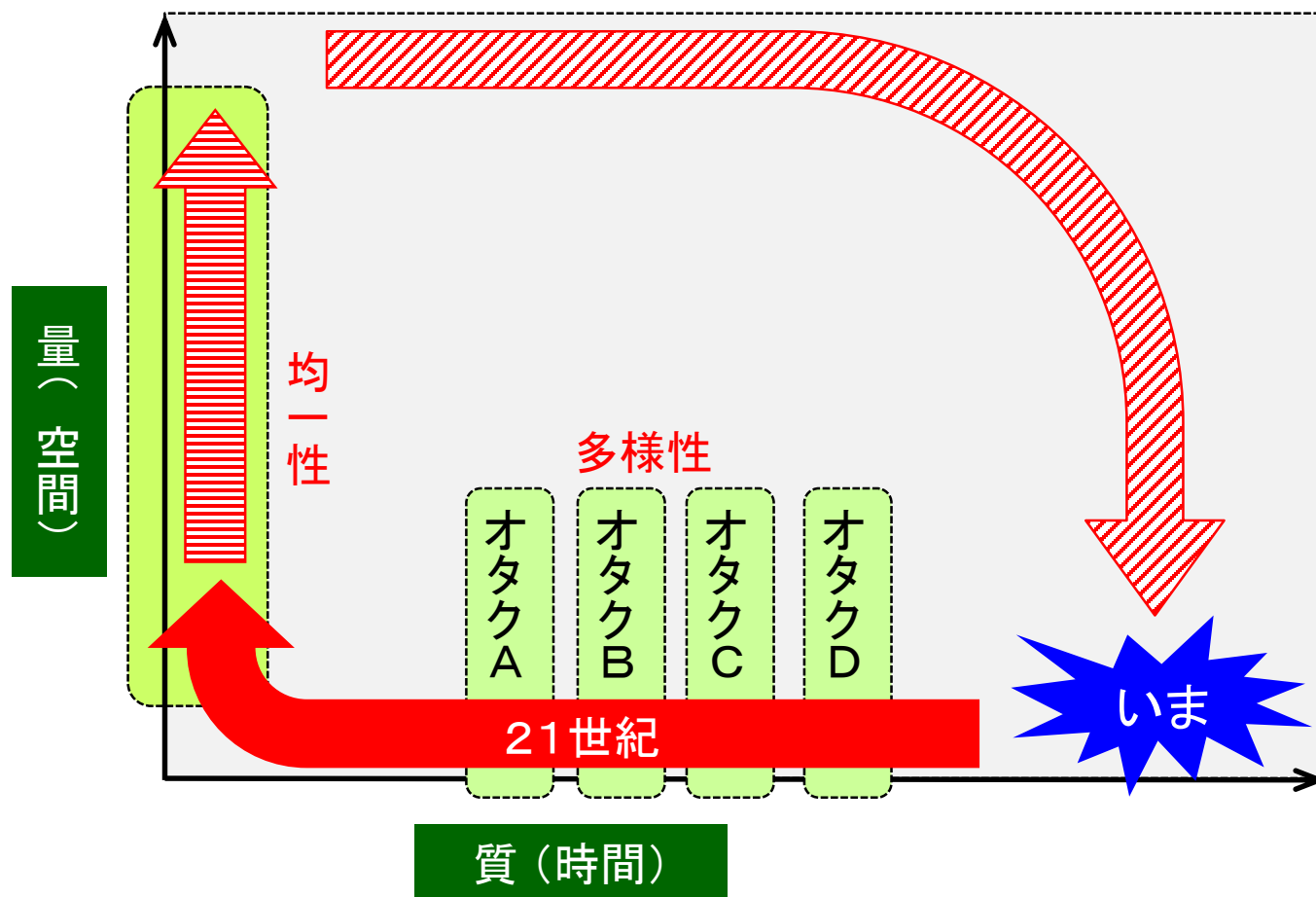


精度を上げる

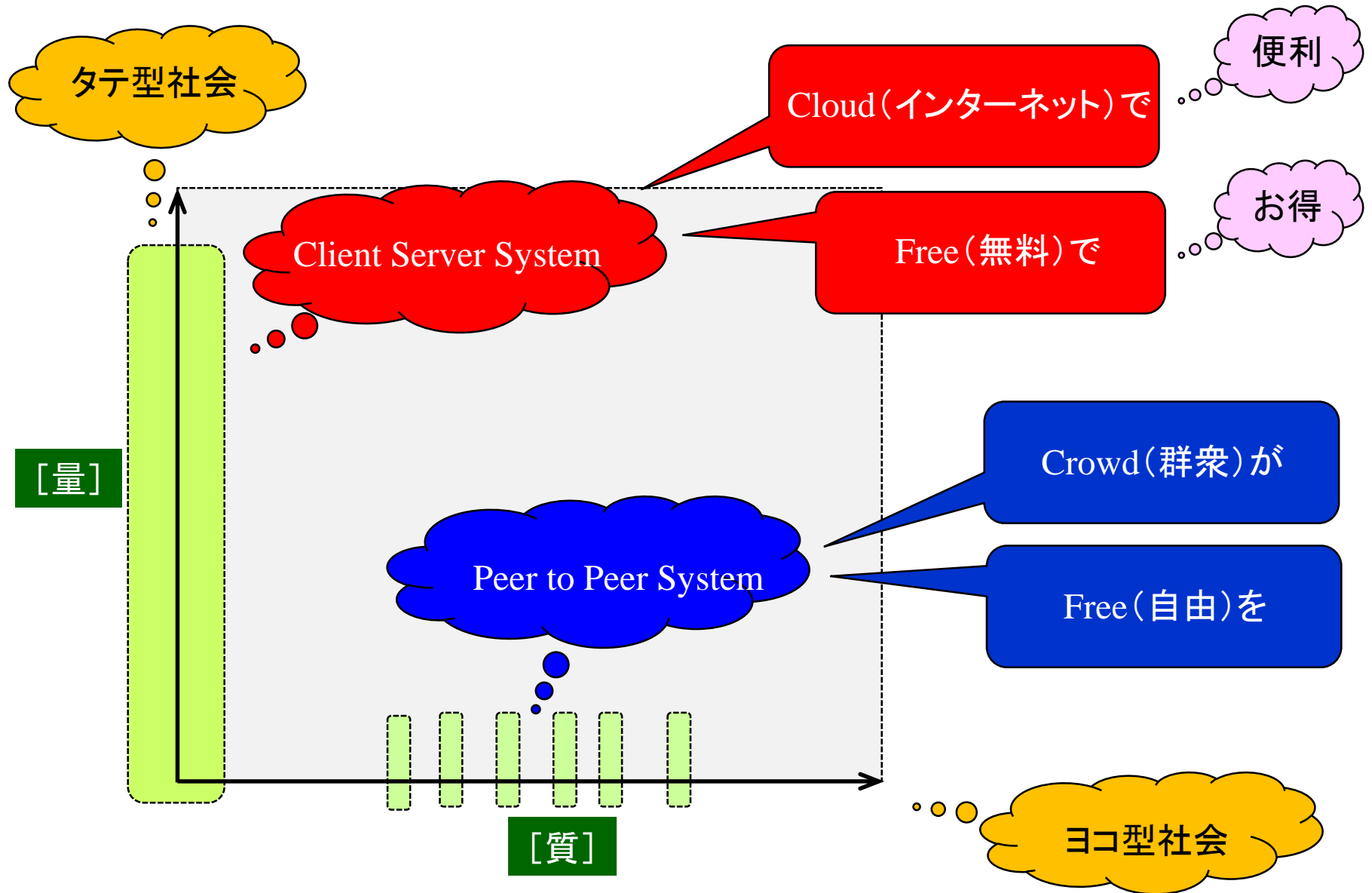


確度を上げる

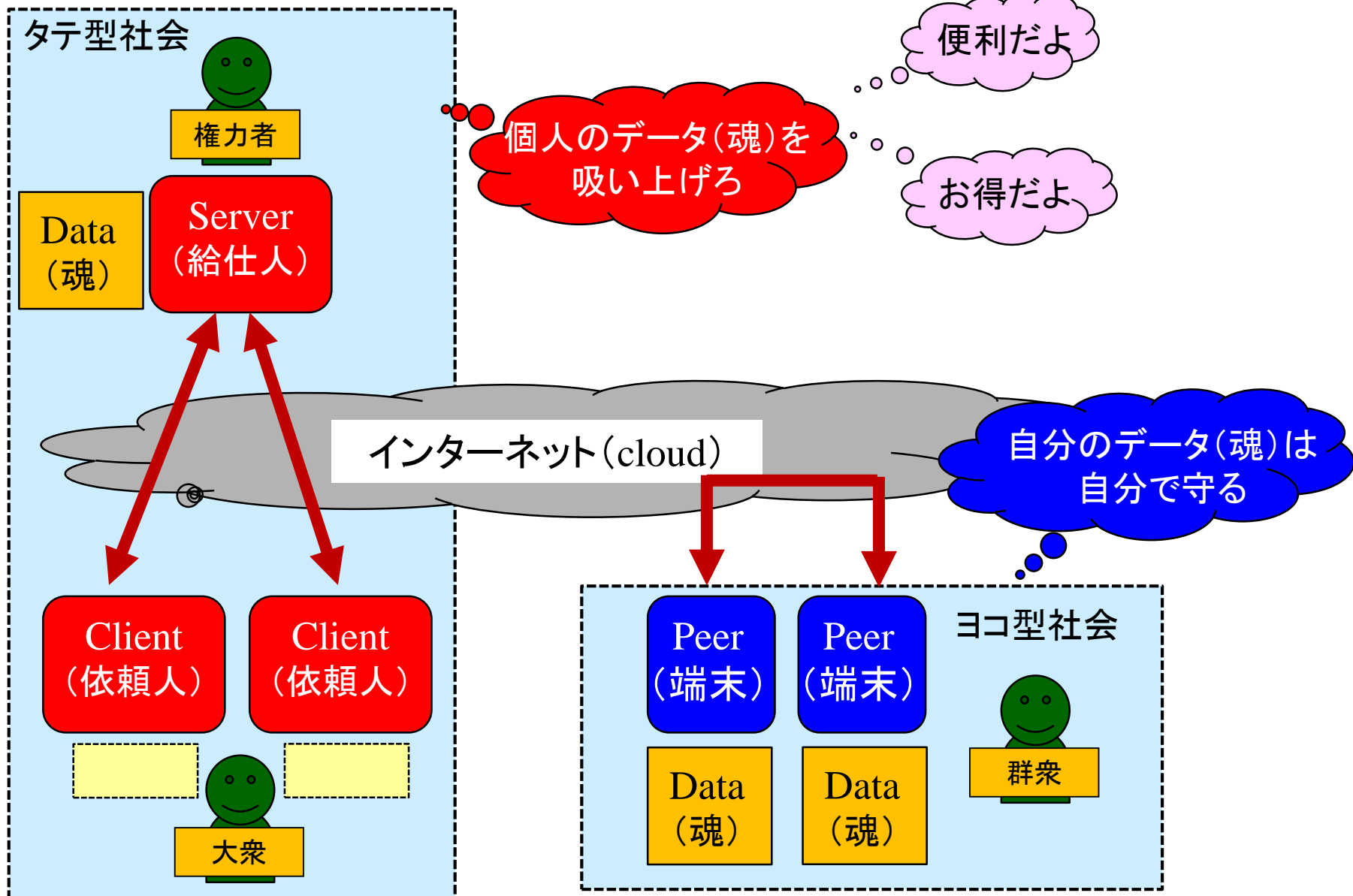
# 「タテ型社会」から「ヨコ型社会」へ



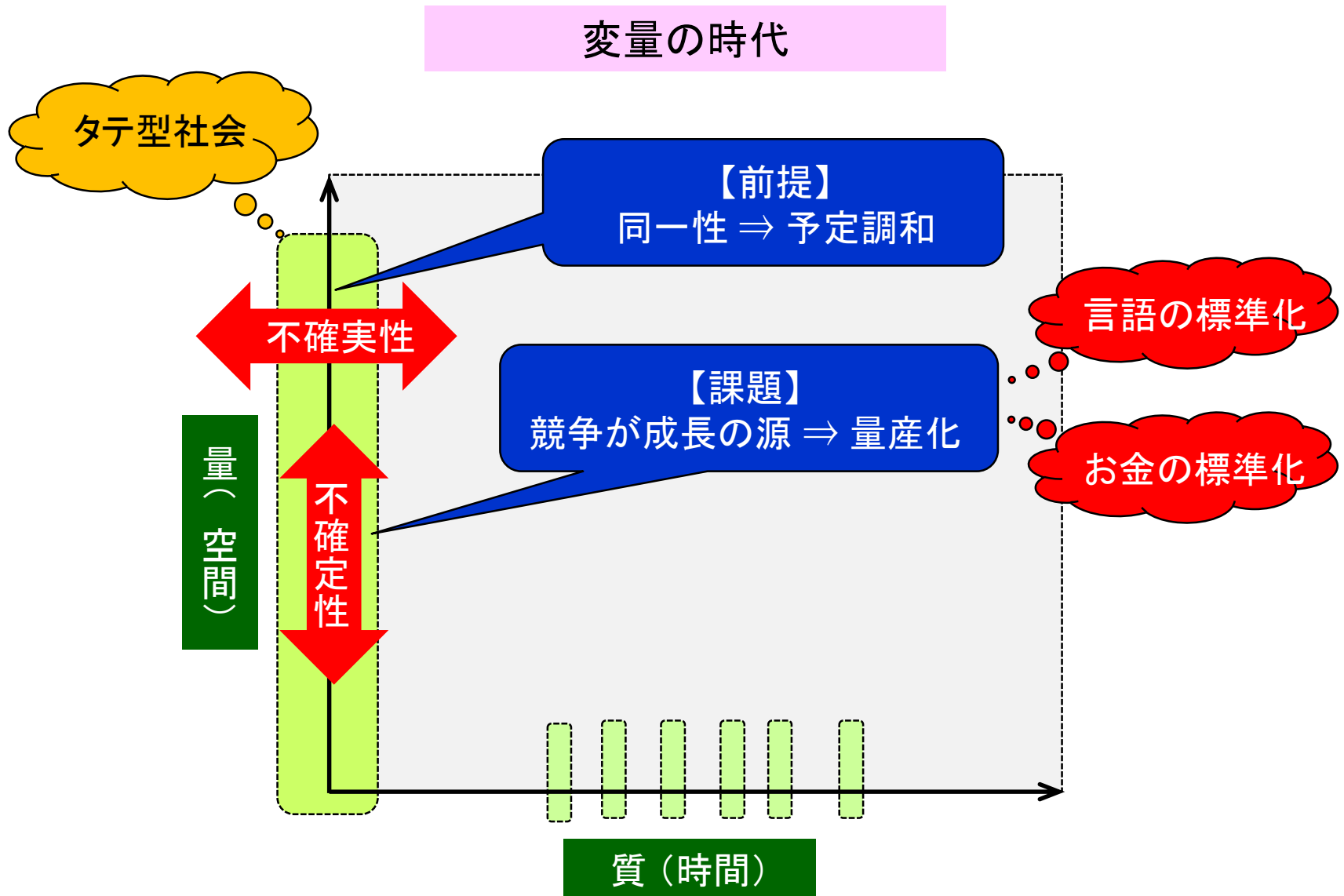
# 「クラウド」「フリー」のタテとヨコ (1)



# 「クラウド」「フリー」のタテとヨコ (2)

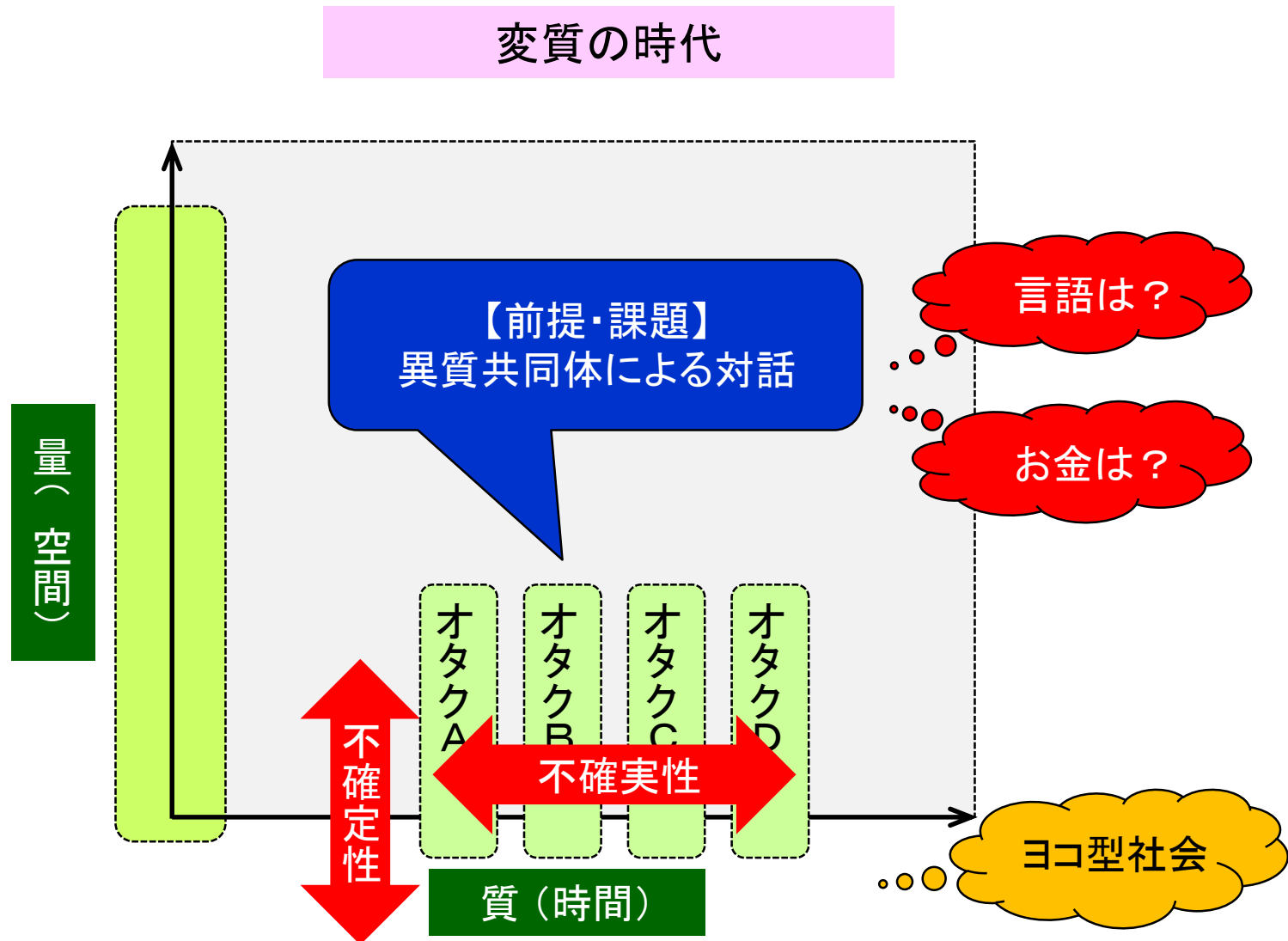


# 「タテ型社会」の不確実性と不確定性

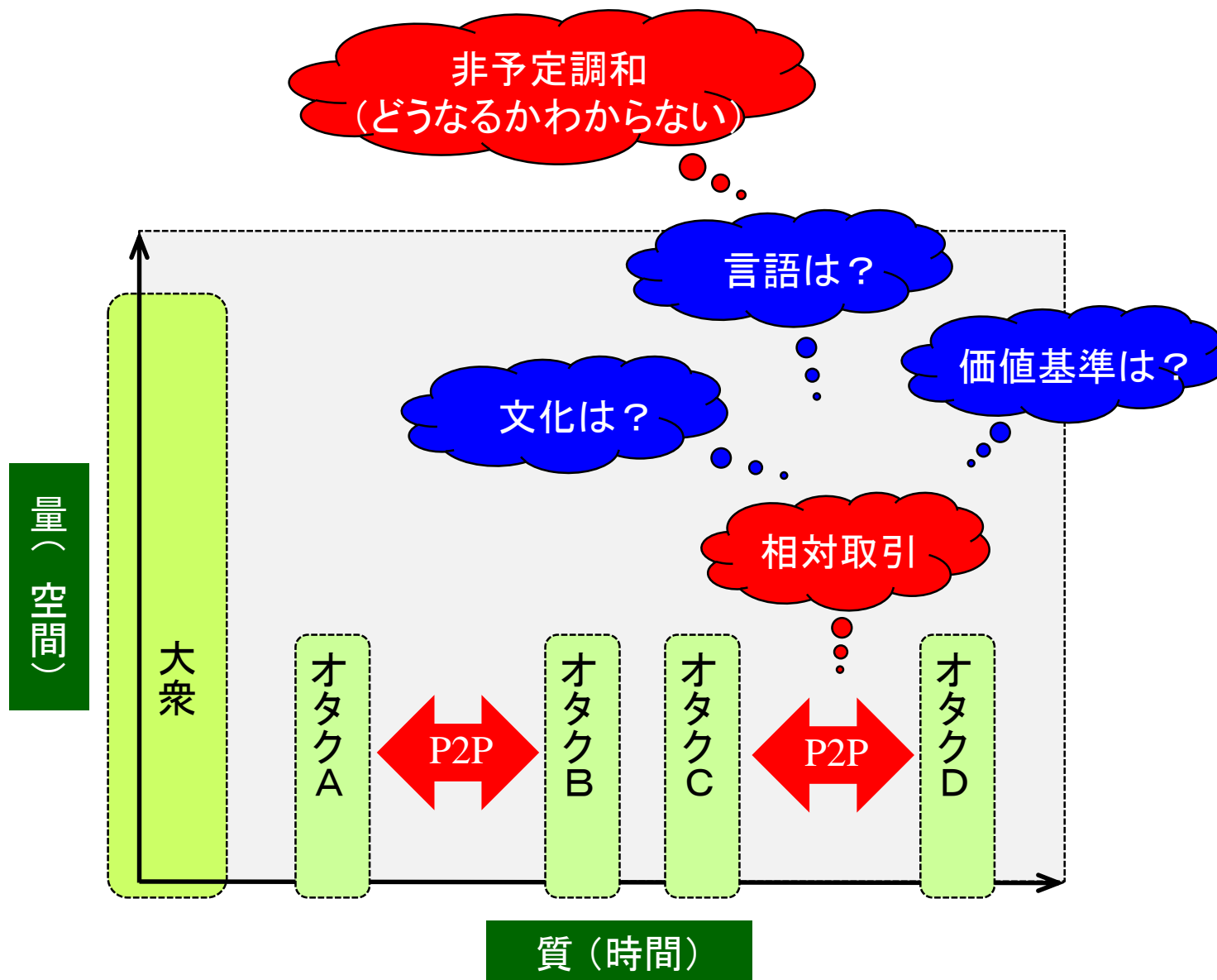




# 「ヨコ型社会」の不確実性と不確定性



# 「競争社会」から「共創社会」へ



# 言語はすべて不完全である

どんな言語の体系もみな不完全で、完全と言えるものは、世界のすべての言語を見渡しても一つもない。論理についても、完全に無矛盾な体系は存在しないことが、現在では明らかになっている。ことば(言語)の体系には、最も始原的なところに、経験による言語の習得という問題が関わっているからである。

人は、経験を通じて、言語表現の仕方を学びとるという作業をするが、人によって、その意味するところが異なる場合のあることが知られている。この不完全性を了承したうえで、私たちは言語による表現に論理性を持たすように、努力しなければならないのである。

『日本語は本当に「非論理的」か』（桜井 邦朋）より

# 「呼びかけ」と「応答」から (1/2)

それぞれ価値基準の異なる共同体のあいだの交換は、等価交換の必要性から生まれたというよりは、異なる言語、異なる価値基準、異なるモラルを有する二者によって行われたコミュニケーションだった可能性が高いと考えられます。

見知らぬものに対する呼びかけと、応答。

実際に対面しませんが、自分たちの共同体とは異なる「外の社会」に対して、最初にすることは呼びかけることです。

何度か呼びかけていると、そこに応答の兆しがあらわれてくる。

「呼びかけ」と「応答」という交換が最初にあったのです。

以前NHKスペシャルが放送した大アマゾンの特集を見たときの驚きを、わたしは鮮明に覚えています。

(中略)

調査隊と、同行を許されたNHKスペシャルの取材班は、ジャングルの奥地、アマゾンの流域で、イゾラドが現れるのを何カ月にもわたって待ち続けます。

(次頁につづく)

『21世紀の楢岡幻想論』(平川 克美)より

## 「呼びかけ」と「応答」から (2/2)

あるとき、ついにイゾラドが対岸に姿を現します。その数は10人ほどでしょうか。

言語も、習慣も、価値観も、文化も、生きている時代も異なる原住民族と初めて出会ったとき、いったい、どうやってコミュニケーションをとることができるのだろうか。

わたしは固唾をのんで事の推移を見守りました。

最初は、調査隊の隊員たちが、鳥やけものの鳴き声をまねしたり、猿のような動作をして、相手の関心を引こうとします。そうすると、イゾラドも同じような声をあげ、同じようにけものの動きをまねします。

これが最初の呼びかけに対する応答でした。

どうやら、イゾラドはこちらに関心を示している。そこで、今度は、ボートの上にバナナを積み上げ、それを対岸へと押し出します。イゾラドは、ボートをキャッチして、バナナをとり、空になったボートをこちら側へ押し戻してきたのです。

わたしが驚いたのは、その次のシーンでした。

帰ってきたボートの中を点検すると、そこにイゾラドの使っている矢じりが置かれていたのです。

このように、最初の交換は行われました。

『21世紀の楢岡幻想論』（平川 克美）より

# 他人の時間を尊重する欧米人

アメリカに留学していたとき、ちょっと驚いたことがあります。

クラスメイトの一人に、親しいドイツ人がいました。ある日、私が教室に入ったら、彼は机に向かって一心不乱に本を読んでいる。私はちょうど彼に用事があったので、軽く声をかけました。

しかし、彼は返事をしない。聞こえなかったのかと思ってもう一度声をかけると、彼はジェスチャーで「今、忙しいから後にしてくれ」と示しました。

そのような場合、日本人だったら、たとえどんなに忙しくても返事ぐらいはするはず。無言でそんな仕草をしたら「失礼なやつ」と思われるだけ。また、そもそも声をかけられて、「忙しいから後にしてくれ」などと言える人も少ないと思います。

小さな出来事ではありますが、自分の時間を守ろうとする彼の強い意志を感じて、私はちょっとしたカルチャーショックを覚えました。

彼にかぎらず、欧米の人は自分の時間をきわめて大事にするように思います。自分の時間を邪魔されることに、徹底的に拒否反応を示します。

自分の時間を守る意識の強い人は、相手の時間も尊重しようとします。逆に言えば、他人のペースに合わせてしまいがちな日本人は、相手の時間を邪魔することに対して、少し鈍感であるように思います。

『レバレッジ時間術』（本田 直之）より